



昨年11月に山科区の勤修(かんじゅう)小学校周辺であった区の総合防災訓練。同小に近接する公園では地元住民が豚汁などの炊き出し訓練を行った。

使っているのは「かまどベンチ」。普段はベンチとして

近年、京都市内で活発になっている。ライフラインが打撃を受けた場合に炊事や発電ができる設備を学校や周辺につくるなど、住民と行政機関が連携して地道な活動を進めている。専門家も、地域で必要なことを議論し、備える重要性を訴えている。

学校の避難所としての機能を高めようとする取り組みが

(2017年1月8日 京都新聞) 災害時に備え、

勤修小学校に近接する公園に設けたかまどベンチ。住民たちが炊き出し訓練を行った(京都市山科区・坂上田村麻呂公園)市販品もいろいろあるが、耐火レンガなどを用いて手作りすることもできる。

「学校」を優れた「避難所」に 炊事や発電などの機能を追加、災害関連死を減らす

使い、非常時は腰掛け部分を取り外して煮炊きができる仕組みになっている。

本年度、住民が市南部みどり管理事務所に依頼して設置した。勤修学区自主防災会の新谷義隆会長(71)は「学校近くに準備しておけば、避難生活が幾分でもしのぎやすくなる。災害関連死を少しでも減らすことにつながるはず」と話す。



災害時の指定避難所427カ所のうち、294カ所を学校施設が占めている京都市。市教育委員会では2012年度以降、避難所となる学校の体育館を改築、リニューアルしながら、太陽光発電パネル設置など災害時に備えた防災機能を強化する。だが多額の費用がかかり、約130校が未工事。完了までに長い期間が予想される中、避難所機能強化のため工夫を凝らした取り組みが進められている。

京北第二小(右京区)では昨年度、敷地内の水路に水力発電できる水車を設置し、災害時に非常用電源として使えるようにした。下水道に直結したマンホールのふたを開けてトイレとして使用できる「災害用マンホールトイレ」の整備を行う学校もあり、山科区の陵ヶ岡小でも一昨年度に設けた。陵ヶ岡学区自治連合会の田中長一会長(71)は「二つ二つ災害時の備えが進んでいけば」と願う。

京都大防災研究所の牧紀男教授(防災学)は

we support ↓
RQ
災害教育
センター

MONTHLY

「東北に黒糖を送ろうー大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけさきた』
「すけさきた」
しんぶん

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ホランティアに来たよ」という
意味である

FEBRUARY
11
2017



東北 Now
宮城県・仙台湾

「学校ははじめから避難所としてつくられたものではなく、災害時に生き延びるために必要な機能を追加していくことが大切。地域として何が必要かイメージし、考えていくことも重要だ」としている。

仙台湾の海岸線には東京湾平均海面を基準とした7.2メートルの高さを持つ巨大な防潮堤が続き、その内側では防災林の復旧が進められています。

(2017年2月6日 朝日新聞航空部)